みずほ銀行の中国における金融事業及びキャリアパスに関する大学生への提案

対外経済貿易大学学生代表

見学日時：2024年12月3日（火）9:00-10:30
見学場所：みずほ銀行

見学概要

訪日交流における重要な一環として、中国大学生訪日団はみずほ銀行を見学し、同銀行の中国における事業展開及び銀行業におけるキャリアプランについて多くを学ぶことができた。今回の活動は、セミナー、座談会及び対話交流を通じて日中両国の青年が金融業界への知見を深め、文化や専門分野における交流を推し進めることを目的としている。

段取りは以下のとおり：

1. 冒頭の挨拶
   まず、みずほ銀行中国営業推進部の松田由己次長から歓迎の挨拶があり、その後、訪日団の徐賜明団長から今回の活動に対する感謝と期待についてお話があった。
2. セミナー
   中国におけるみずほ銀行（講演：黄穂冰女史、中国語）
   行員の生活とキャリアパス（講演：手嶋徹也みずほ銀行中国営業推進部執行理事、日本語、黄穂冰女史による通訳）
3. 座談会
   みずほ銀行の黄穂冰女史、王博氏、趙婧女史及び小川隆那女史から自己紹介があり、その後訪日団の団員と各グループに分かれ座談を行い、金融業及び行員の普段の仕事について深く議論を交わした。その際、行員の皆さんからは就職に関して貴重なご意見をいただいた。
4. 閉幕、記念撮影
   手嶋徹也執行理事からの閉幕の挨拶の後、訪日団は今回の参加者全員と記念撮影を行い、今回の活動は円満に終了した。

今回の見学を通じて、訪日団の団員らはみずほ銀行の国際的事業展開、企業文化及び行員のキャリアプランなどについて知見を深めることができた。それと同時に、今回の見学は今後の日中間の金融協力と若者交流にさらなる活力を注入するものとなった。

みずほ銀行での中国大学生訪日団への歓迎の様子

みずほ銀行の公式キャラクター、あおまる

みずほ銀行での中国大学生訪日団による記念撮影の様子

ご存じですか？

以下は対外経済貿易大学の団員らがまとめたみずほ銀行に関連した情報である。

みずほ銀行（Mizuho Bank）は日本の大型商業銀行であると同時に日本の三大銀行の 1 つでもあり、その企業グループの歴史は 151 年前（1873 年）に遡る。みずほ銀行は、「第一勧業銀行」、「富士銀行」及び「日本興業銀行」の統合・再編により生まれた「みずほ銀行」と「みずほコーポレート銀行」が 2013 年に合併し正式に誕生した。

日本の銀行金融業において抜きん出た存在であるみずほ銀行は、日本国内に 2200 万人を超す個人顧客の他、180 万を超す証券総合口座を擁している。支店は日本国内の 47 都道府県に分布し、2023 年には日本国内の銀行でシンジケートローン市場シェア第 1 位との実績を挙げている。みずほ銀行は日本の金融サービス分野において幅広い影響力を擁しているのみならず、地域や国の垣根を越え、世界中の国や地域で事業を展開している。

日本最大の金融機関であるみずほ銀行のグループ組織と事業は、銀行、信託、証券、資産管理及び調査研究・コンサルティング等様々な従来の金融業をカバーするなど、日本国内外の個人から企業に至るまで、多くの顧客層にサービスを提供している。個人向けの業務に関しては、みずほ銀行は個人の顧客に向けて預金、ローン、クレジットカード、財産管理等のサービスを提供している。また法人向けの業務に関しては、中小企業及び大企業の顧客に向けて融資、現金管理、貿易金融等のソリューションを提供している。投資業務に関しては、みずほ銀行は消費者に向けて企業の合併買収、新規株式公開、デットファイナンスを含む資本市場関連サービスを提供している。みずほ銀行は

顧客への全面的且つ多様化した金融商品及び金融関連サービスの提供に力を注いでいる。

中国と一衣帯水の隣国である日本の三大銀行の１つとしてみずほ銀行は、日中両国の提携に積極的に関わっている。1979 年、中国における改革開放の動きに伴い、みずほ銀行は中国において第１回「中国産業金融研修会」（後に MSF：Mizuho Finance Seminar と改称）を開催するなど、中国の政府当局、金融機関及び企業の幹部に日本の経済、産業そして金融市場に関する日本での研修との貴重な機会を提供。1981 年、中国北京に駐在員事務所を開設。1987 年、初の外資系銀行として深圳支店を設立。1992 年と 1995 年にはそれぞれ上海支店、浦東新区初の外資系銀行支店を設立。1997 年には外資系銀行で第一陣となる人民元業務を開始するなど、その後人民元クリアリング業務を邦銀第一陣として開始。2007 年には邦銀初の現地法人となる、みずほコーポレート銀行（中国）有限公司を開業など、21 世紀に入ってからもみずほ銀行は中国との関わり合いが続いており、「パンダ債」の発行やグリーン預金業務の実施など、みずほ銀行は中国における事業を長い歴史と共に順調に拡大している。

みずほ銀行の中国政府高官との交流もまた日中両国の事業提携における美談となっている。1990 年、李鵬総理（当時）が中南海において黒澤会長（当時）と池浦取締役（当時）と会見。そして 2000 年には朱鎔基総理（当時）が中南海で西村頭取（当時）と会見。2019 年にはみずほ銀行の佐藤取締役会長（当時）が北京において陳吉寧北京市長（当時）や蔡奇中国共産党北京市委員会書記（当時）と会見している。またみずほ銀行は、中国発展ハイレベルフォーラム、上海国際金融センター専門家諮問委員会、陸家嘴フォーラムといった中国での経済フォーラムや重要な経済会議に積極的に参加している。

みずほ銀行は中国の政界及び大型提携会議と密接な交流があるのみならず、中国の企業や大学とも多くの業務協力を行っている。1980 年代からみずほ銀行は中国の政府機関、金融機関、企業及び大学等 160 以上の機関や組織との間で業務協力協定を締結しており、その事業範囲は沿海地区から北京、天津、青島、大連、合肥、蘇州、昆山等中国各地に広がっている。そして協力関係にある大学には清華大学、対外経済貿易大学、中国海洋大学等が含まれている。ちなみに、私たちがみずほ銀行を訪問した当日、山東省青島市政府の関係者もみずほ銀行本部を訪れ、提携事業に関する協議をしていた。

みずほ銀行は絶えず変化する世界の金融環境において多くの挑戦や機会に直面している。そうした中、みずほ銀行は今後もリスク管理やコンプライアンス管理を強化し、安定した経営戦略を継続していくと同時に、より一層海外市場を開拓し、世界における業務能力を向上することで顧客が最優先する金融協力パートナーとなるよう努めていくことを私たちは今回知った。みずほ銀行はその歴史的蓄積、幅広いサービスネットワーク及び強大な金融力により世界の金融市場において重要なポジションを占めている。世界経済の発展そしてフィンテックの絶え間ない進歩に伴い、みずほ銀行は今後も引き続き金融分野における重要な役割を果たし、顧客に優れたサービスやサポートを提供していく。

みずほ銀行は長い歴史とイノベーション精神を備えた金融機関であり、その非常に発達した事業分布と社会的責任への重視により、経済の発展と社会の進歩に尽力している。それは正にみずほ銀行の企業文化で言うところの「ともに挑む。ともに実る。」である。

見学の際に面白い事があった。

黄穂冰女史は、以前とある顧客から彼女の名前の中の「穂」の字が「みずほ（瑞穂）銀行」の「穂」と偶然一致していると冗談交じりに指摘されたことがあり、こうした奇妙な縁が彼女をみずほ銀行で働くことを運命付けた要因なのかもしれないと笑いながらお話されていた。

手嶋執行理事は各団員のテーブルにご自身のプロフィールを準備されていた。これには驚かされ、またそれ以上に彼の今回の活動への真摯な姿勢に感銘を受けた。手嶋執行理事からは、現在みずほ銀行においては、新卒者は入行から５年後にはその半数が転職し、10 年後には３割しか残らないが、彼自身がみずほ銀行で 25 年間終始働き続けられたのは、それが自分の好きな仕事だったからであるとのお話があった。彼からはまた、語学力を高め少なくと

も 3 つの言語を習得すると同時に、何かをする上でのモチベーションがある時にはそれをすぐに行動に移した方が良いとのアドバイスをいただいた。こうした貴重なアドバイスは、現在キャンパスと職場の間の十字路にある私たち学生にとって戒めの言葉だと言える。

感想

みずほ銀行への訪問を終え、同銀行の日本の金融業における重要な地位そして影響力を感じた。みずほ銀行は第一勧業銀行、富士銀行及び日本興業銀行の統合・再編により 2002 年に生まれた「みずほ銀行」と「みずほコーポレート銀行」が 2013 年に合併し誕生した日本国内で最大の顧客群を擁する主要銀行の 1 つで、国内外に多くの出先機関が存在する。みずほ銀行は中国でも幅広く事業を展開しており、1987 年には深圳に支店を設立し、その後中国で初めて現地法人を設立した邦銀となっている。現在、みずほ銀行は中国において多くの営業拠点及び駐在員事務所を構え、主に日系企業、中国系企業及びその他アジアや欧米企業向けにサービスを提供している。事業範囲は外国為替業務、人民元預金・貸出業務、輸出入に絡む信用状、貿易手形、担保、送金、外国為替のフォワードトレード等多岐にわたる。その他、みずほ銀行は中国でのコンサルティング業務も広く展開しており、市場調査、提携先探し、政策法規解説、会社の設立及び運営等多方面のサービスを顧客に提供している。

みずほ銀行への訪問を通じて、同銀行の世界の金融市場における大きな役割及び日中両国の経済交流における貢献について知見を深めることができた。これらはイノベーションと市場の変化への適応が、金融機関が持続的に発展していく上での重要な要素であることを反映していた。

とても印象深かったのは手嶋執行理事の講演で、彼からは間もなく就職の問題と直面する私たちに向けたとても実用的なアドバイスをいただいた。「将来の勤務地は国内か国外か、家族の傍に残りたいのかどうか」、「語学力はどうか」、「個人の長所をいかに発揮して競争相手と差別化するのか」、「勤務開始後に転職したいのかどうか」、「機関の中と外のどちらで働くのか」等の現実的な問題に関し、手嶋執行理事から非常に多くの実用的なアドバイスをいただいた学生らは、将来の就職に向けた方向性に関し、これまで以上に明確で具体的な目標を持つことができた。

また質疑応答のコーナーでは、中国石油大学の王毅竜さんと対外経済貿易大学の肖瑩盈さんから手嶋執行理事へ以下の質問があった。

問（王毅龍さん）:「起業においては情熱と注目の集まる事業のどちらを重視すべきですか？」

答（手嶋執行理事）:「個人的には情熱を重視します。なぜなら情熱は得難く尊いものだからです。情熱は起業における基盤で、挑戦に立ち向かい、イノベーションを継続し、企業文化を築く手助けをしてくれます。情熱がなくなれば継続におけるモチベーションもなくなります。注目の集まる事業をわざわざ待つ必要はありません。それは外在的な後押しであり、情熱こそが成功の始まりです。もちろん、情熱と注目の集まる事業を融合させ、市場におけるチャンスを掴むことができれば起業の成功率はより高まります。ですが、いずれにしても情熱を持ち続けることが起業に成功するための第一歩です」

問（肖瑩盈さん）:「勤務開始当初から仕事におけるご自身の目標や興味が明確であったことを非常に羨ましく感じています。つきましては未だ就職における方向性や目標が定まっていない学生に対し何かアドバイスはありますか？また、どのようにして仕事に対する興味を持ち続けていますか？」

答（手嶋執行理事）:「自己探求、キャリアプランの制定、専門的指導、学習の継続、実務経験の蓄積及びネットワークリソースの利用などを通じて段階的に自身のキャリアパスを見つけることができます。仕事に対する興味を持ち続けるとの点に関しては、仕事の意義を見出し、目標を設定し、常にチャレンジ精神を持ち続け、仕事と生活のバランスをとり、前向きさを持ち続けると共に、フィードバックを通じて個人としての成長を実現することが大切で

す。キャリアアップは動的調整と絶え間ない進歩のプロセスであり、重要なのは好奇心と適応力を持ち続け、自身のキャリアにおける目標を段階的に明確にすることです」

手嶋執行理事による丁寧な回答を拝聴した学生らは多くの収穫を得た他、自由交流のコーナーではまた積極的にみずほ銀行の行員と交流を深めた。